

## 常発地でのセジロウカ個体群の1962年度調査

大 竹 昭 郎

(農林省北陸農業試験場)

セジロウカの常発坪がどのようにしてできるかについては、次のような可能性が考えられる。

- 1 6月末から7月にかけて移住してきた成虫密度が他の場所より高いところに行けるであろう。
- 2 移住してきた成虫密度は他の場所と変わらないが、そこに居ついて子孫を残すものの割合が高い場所に行けるであろう。
- 3 移住してきた成虫の密度も高いし、それらが居つく割合も高いためにできるであろう。

これらの可能性を検討するため、1962年7月から8月にかけて、新潟県東頸城郡柿崎町雁海の常発田で調査を行なった。この田は面積約2.5アールで、毎年高い密度でセジロウカが発生する。この田とそれに隣接する3

枚の田(発生の多い年以外は密度は高くない)の中に調査区を設け、その中で掬いとり調査をした。しかし、62年は、上越地方でのセジロウカ発生が極端に少なく、常発田での密度も低かつたため、結果は明瞭とはいえなかつたのであるが、捕虫網1振り当りの成虫数では常発田は他の3枚の田に比べて飛来成虫の密度が若干高いようであつた。例年ならば、調査を行なつた場所は非常にむし暑いとのことであるが、62年には風がよく吹きぬけ、むし暑さを感じさせなかつたのでこのような例年と異なる気象条件が、ウスカ密度の低下と関係しているのかもしれない。

なお、田の中でのウスカの分布には、目立つたむらは認められなかつた。

## 福井県におけるツマグロヨコバイ発生の動態について

高 島 敬 一

(福井県農事試験場)

### 緒 言

全国的にみて、ツマグロヨコバイの発生予察には、気象条件(前年秋期、冬期、春期、夏期)と発生量との関係による方式、発生消長によるものなどがあり、類似的な面はあるにしても、それぞれ地域性があり複雑性があるようにうかがわれる。

本県ではさきに県内発生<sup>9)</sup>の地域性、気象と発生量との相関による予察式を報告したが、発生の動態をさらに明確にしようと、発生の年次変動、年間経過、その原因特に気象と発生との関係などを検討した。ウスカ・ヨコバイ類群集構成の検討による同類の勢力については、さきに地域性を報告した<sup>9),10)</sup>が、ツマグロヨコバイ発生期における年次的変動についても検討した。

**発生量の年次変動** さきに発生量、発生消長により地域分けを行なつたが、<sup>9),10)</sup>年次変動の相異性からしてもこれと同様に嶺北の奥越(大野管内)を除く地方(嶺北大

部)、奥越地方、嶺南地方に大別される。第1回のとおり年次的にみて、嶺北地方大部では明瞭に多発生か少発生であり、大野管内では少し中間の年が現われる傾向があり、嶺南地方では多発生より少発生まで各種段階が現われる。総誘殺量が約10万以上が多発年(防除年)であることは石川県と同様と考えられる。

年次変動の原因は、気象要素と発生の相関関係、発生の年次動向より、越冬前、冬期間の気象条件(越冬前の主として気温、降水量、積雪期間)などに強く支配されるものと考えられ、年次間の発生量の関連性は余りないものと思われる。嶺北地方では、ほとんどの年次がこれら要素によつて決定づけられる。これらにより越冬量に差異が現われ、ひいては初期発生量に大小顕著な差が現われ、それ以降、後期までそれが反映する。嶺南地方ではこれらによる越冬量への影響がやや薄らいでいて、その後も気象その他の条件により複雑に影響されるものと考えられる。初期発生量は、概ねの年が嶺北にくらべて